

いったいここに何人いるのか

—分割脳と心的な多者の問題をめぐって—

柏端 達也

これから提示する話は十分な論証の形をしておらず、また、そこで示唆される結論に私自身それほど確信があるわけでもない。私がこの論文で行ないたいことは、従来異なる文脈で論じられてきた問題群のあいだにじつは本質的な結びつきがあるという事実を強調すること¹と、それらのいずれに対する解答としてもまともに扱われることのなかったあるグロテスクな考えをすこしだけ擁護してみることである。

1 心を数える

ある領域にいくつの「心」が存在するのかという、問いの一般的な形式がある。たとえば分割脳のケースをめぐる問題もその形の問いの一種である²。分割脳のケースとは、脳梁を手術によって切断された患者が、特定の実験的環境において、左脳を含む神経系に支配された身体部分と、右脳を含む神経系に支配された身体部分とで、それぞれ独立の心的活動を示すように見えるというケースである。大脳の空間的な分割によってそうしたことが起こるわけだから、問題の領域としてはまず空間的なものを考えればよい³。話はここまででもかなりファンタスティックであるが、まだ続きがある。哲学的に興味深い事実は、実験から解放された分割脳患者が、こんどは「一人の人間」として完全に統一的な心的活動を示すことである。心が時間的に延長しうる、あるいは時間を通じて同一でありうるという常識的前提のもとで、その事実は、いくつかの哲学的問題を生じさせる。心を数えることに関して言えば、問題は、一定の時空的領域をどのような仕方 で心が占めるのかというものになる。

T・ネーゲルは、こうした分割脳のケースが「人格の統一」や「意識の単一の主体」といったおなじみの可算的な心の概念と折りあわないことを論証しようとした。ネーゲルはまず、問題の実験的環境において分割脳患者の心がただかただか一つであるとする解釈を退ける。ネーゲルによれば右脳の統御のもとでなされた諸活動は、言語的に自覚されたり報告されたりしないとしても、「無意識の自動的反応の集まりと見なされるには、あまりにも精巧であり、志向的に方向づけられており、心理学的に理解可能」である。やはりそこにはほんとうに二つの独立した「経験と行為の主体」を見いださざるをえない⁴。

独立の心的活動が見いだされるというのは、たんに右手と左手がばらばらに動くさまが観察されるといったことではない（それなら普通のピアニストの中にも観察できる）。そうではなく、互いに整合しない二つの命題的態度群を、一つの身体の諸部分に帰属させられるということである。すなわち、右手と左手が同じ形のもを触っているかどうかを報告できないとか、右脳の制御により「I」の字を書きつつ左脳の制御によってそれを「E」にしてしまうといったことである。領域全体に整合的な一群の態度を帰属させられることが、その領域における一つの心の存在の必要十分条件であるとする規準は、問題に答えるためのさしあたり有力なツールとなるだろう⁵。ネーゲルも、明示的にはないが、論証の過程でその規準を用いている。

ところがその規準を前提にすると、非実験時における分割脳患者の態度の否定しがたい統一性（単一性）が、心の数の問題を解決困難にする。われわれは通時的にこれをどう理解すればよいのか⁶。ネーゲルは、実験前には一つである心が実験時には二つになり、実験終了後ふたたび一つに戻る、という解釈を非現実的なものとして退けている。心の分裂と再統合であれ、追加的な心の発生と消滅であれ、そうした解釈がもたらす光景は、ネーゲルによれば、この問題を解くただけに受けいれるにはあまりにも「異常」なものである⁷。じつさい、それがどのようなことかを想像するのはわれわれには不可能であろう⁸。けっきょく、われわれの手持ちの概念に従うかぎり、分割脳のケースにおいていくつの心が存在するのかを決めることはできない、というのがネーゲルの結論である。彼によれば、平時の分割脳患者は「正常な脳をもつ通常の人」と「協同作業が要求される仕事に従事する二人一組の個人」との中間的ケースであり、

そのどちらかの極と同一であることはないのである⁹。

ネーゲルの議論に関して、ここでは次の以下の点を強調しておきたい。まず第一のポイント。心を諸態度の整合的な統一体以上のものでないと考えるのであれば、そうした「心」の分裂や再結合、発生や消滅といったストーリーはじつは理解不可能ではない。ネーゲル自身があげる協同作業のケースを考えられたい。協同作業に従事する二人には、一群の集団的な意図や信念などが見てとれるはずである。それらの態度群は、その協同作業のために形成され、作業の完了や中止とともに消滅する。そのような集団的態度の統一体の（一時的）存在は、二人の個人が他方で独立の個人的態度をもつことを妨げない。分割脳のケースにおいて類比的なストーリーを不可能に感じさせているのは、したがって、そこに読みとれる態度群のあいだの関係性ではなく、いわゆる意識や、内面を伴う主観的な視点、分割脳患者であるというようなことといったものの存在の仮定である¹⁰。次に第二のポイント。分割脳患者の心のあり方にはもう一つの解釈があり、ネーゲルはそれを帰謬法の帰結部分のような扱いで退けている。その解釈とはすなわち、分割脳患者はつねに（つまり非実験時も）二つの心をもつという解釈である。そのような解釈は、ネーゲルによれば、正常なわれわれもまた互いに気づかないだけで二つの心をもつという結論へと導かれかねないため、受けいれられない。そうした結論は、議論のそもそもの土台であるわれわれの「単一の心」という概念を掘り崩すがゆえに、ナンセンスである¹¹。この「もう一つの解釈」へはあとでまた戻るので覚えておいてほしい。

2 猫を数える

心を数えるという話題からちょっと離れよう。われわれは、ある一定の時空領域の全体に対して、たとえば「猫である」といった述語を適用したりする。その種の述語があてはまるのは、問題の領域の全体であり、その領域の小さな一部分ではない。この適用条件は特徴的である。「青い」などの多くの述語は、対照的に、それがあてはまる時空領域のうちの小さな一部分に対しても適用可能だからである。

だが以上の話は厳密な観点のもとで疑うことができる。猫が微粒子の集合体

であるという経験的事実を踏まえ、さらに当の猫に属するかどうか曖昧であるような周辺部分がつねに存在することを考慮するなら、「猫である」という述語があてはまる時空領域も、厳密には、当初思われたように一定（一つ）ではなくなるからである。つまり「猫である」という述語は、やはりその述語の特徴上、ある一つの領域に対して適用可能であるならば、その領域とは微妙に異なる（大幅にオーバーラップする）無数の領域に対しても同様に適用可能なのである。よって、その場面での猫の厳密な意味での唯一性は否定されるように思われる¹²。

関連して次のような議論がある。猫のしっぽを除いた部分も「猫である」資格をもつように思われる。しっぽを失ったぐらいで猫でなくなることはないからだ。もし物体の切り離されていない部分の存在を認めるのであれば、しっぽ以外のすくなくとも「猫である」ような部分は、しっぽを失う前から存在していたことになる。つまりある領域の中に複数の猫が同時に存在していたことになりそうなのである¹³。「一軒の家である」という同種の述語を例に考えてほしい。ガレージが家の一部なのか単なる付属物なのか断言しにくい点に注目すれば、この話は、前段落の話によく似たものに見えてくる。

これらの「問題」はわれわれの日常生活に動揺をもたらさないだろう。猫を数えるという常識的営みがこれらによって妨げられるとは思えない。通常複数匹と数えられる猫は（シヤム双生猫でさえ）上述のような仕方では大幅にオーバーラップしていないのである。それゆえ哲学者の課題は、むしろわれわれが日常の営みにおいてこの厳密な多数性をいかにやり過ぎしているかの説明になる¹⁴。

3 心的な多者の問題

前節の最初の問題は「多者の問題(problem of the many)」と呼ばれる。多者の問題をその名で最初に論じたP・アンガーは、近年、その問題が心の哲学に対してある厄介な帰結をもつことを指摘した。アンガーの指摘を再構成すると以下ようになる¹⁵。

心と身体に関してわれわれが抱く科学的世界像の中核にあるのは、次の二つ

のテーゼである。

- [1] われわれの誰もが、高度に複合的な物的システム（身体）である。
- [2] われわれの心的活動はその物的システム（身体）の物的活動によって実現される（それにスーパーヴィーンする）。

これらは物理主義の主要テーゼであり、[1] が唯物性、[2] が物への心の依存を表している。ここで前節の議論を踏まえれば、

- [3] 高度に複合的な物的システムである「一つ」の身体に関しても多者の問題が生じる。つまり、たとえばここにも（いま入力した文字を私がこうやって見ているここにも）、厳密には、大幅にオーバーラップする無数の身体がある。

が得られる。ここまではよい。[3] の帰結は、たしかに意外であるかもしれないが、前節の猫の話の意外さを超えるものではない。しかし以上の三つを前提にすると、より受けいれがたい帰結が導き出される。すなわち、

- [4] 科学的世界像（[1]、[2]）のもとで [3] を考えれば、ここには、無数の心的活動主体が同時並行的に存在することになる。

これと同じ帰結は [2] をより科学主義的でない形にしてももたらされる。たとえば、これはアンガー自身のとる立場だが、一定の物的な制約のもとで物的でない力や自由をもつ心が物的なシステムから「創発」すると考えても、結論は変わらない¹⁶。意識や思考や知覚経験といったあらゆる心的活動の主体が、たとえば私がいま座っているここにも、やはり無数に存在することになってしまうのである。

第1節の最後に示したポイントの一つがここでも関わってくる。つまり、心をたんに命題的態度の統一体と見なすならば、[4] もそれほど受けいれがたくは感じられない。映画の撮影で五十人のエキストラがいっせいに出口に向かっ

て走るとしよう。それは一定の集団的態度によって特徴づけられる五十人の共同行為である。そのとき、そこから一、二名を除く大勢のエキストラによる行動も、同じタイプの同程度の規模の共同行為でありうるだろう¹⁷。それらの行為を考えあわせるなら、ここには同時に千二百七十六の共同行為主体すなわち「われわれ」が存在することになる。これはくだらない主張に聞こえるかもしれない。千二百七十六の「われわれ」の一つ一つが同時に問題になることなどまずないからである。しかしこの帰結は厄介なものではない。純粋に機能によって個別化されるシステムの多数性は、ようするに、特別な問題を生じさせないのである。たとえば生物の咀嚼機能は生物の物的なシステムによって実現される。それゆえ、私がいま座っているここには無数の咀嚼システムが存在することになるが、それは前節で述べた猫の多数性とそれほど異なるものではない¹⁸。固有の視点をもつ意識や思考や経験の主体が無数に重なってあるという帰結こそが、受け入れがたいのである。そのような意識や思考や経験の存在は、互いに他から独立であるように見える¹⁹。そのため「ほぼ一つ」といった方便でそれらの多数性をやり過ごすことはできない。

こうして、[4] に直面したアンガーは以下のことを示唆する。

[5] デカルト的な実体二元論のもとで [3] を考えれば、ここにオーバーラップする無数の身体があるとしてもそれらと相互作用するのは単一の心的活動主体である、と自然に見なすことができる。

実体二元論という前提はともかく、[5] の結論部分の意外さは、あるとしてもわれわれが [3] を目にしたときに感じる意外さと変わらない。したがって [4] と [5] の結論を比較すれば、この問題がもたらす状況は二元論に有利なように見える²⁰。

4 思考する動物（あるいは頭部）の問題

ここで、E・オルソンが「思考する動物の問題(problem of the thinking animal)」と呼ぶものに触れておくことは有益だろう。その問題は次のようなものである。

人(person)とその身体は、同一性の条件を異にしており、同一ではないとされることがある²¹。ここでもし前節の [2] のようなテーゼを受け入れるなら、人の身体は心的な活動主体である。他方、人も、これはむしろ明白に心的な活動主体である。心的な活動主体が多すぎるのではないか²²。

オルソンは、より以前にも「思考する頭部(thinking head)」に関して類似の問題を提起している。すなわち、人の切り離されていない頭部もまた、心的な活動を実現するのに十分な物的システムであるように思える。もとより頭部と人は異なる存在者である。するとここに複数の意識や思考や経験が存在することになるのだろうか²³。もし猫が心をもつならば、やはり同様の物理主義的前提から、猫のしっぽを除く部分もまた（それを「猫」と呼ぼうが呼ぶまいが）心的活動の主体であることになるだろう。

オルソンの提起した一連の問題は、アンガーの指摘する前節の厄介な事態が、多者の問題を經由しなくても生じうることを示している。^{かなめ}要はむしろスーパーヴィーニエンスに関する [2] のテーゼである。それが多数の心という受け入れがたい事態をもたらしている。アンガーの問題とオルソンの問題の大きな違いは、後者が人とその身体（またはその真部分）という非対称性を前提にしている点である。一方、アンガーのストーリーは、等しく人であったり等しく身体であったりするような無数の存在者をめぐって展開する。オルソンの問題の非対称性は、興味深い認識論上の問題をひき起こす。心の存在の多数性をひとたび認めたならば、自分が（つまり、いまこれを書いている私が、そしていまそれを読んでいるあなたが）人なのかそうでないのか分からなくなるという問題である。多者の問題を經由すればそのような問題は生じない。

オルソンの問題にあっても、二元論はジレンマ（あるいはトリレンマ）の目立つ一つの角である。たとえばS・シューメーカーは、人と異なる身体の実在を認めたくて、身体は心的性質をもたないと結論づけることにより、オルソンの思考する動物の問題に答えている²⁴。シューメーカーの答えは、[2]のテーゼをすくなくともそのままの形では否定しており、その意味で非物理主義的であるように見える。また、人が心的性質をもつということが、心理的連続性という同一性規準にまさしく依っているように見える点で、ある種、二元論的だとさえ言いたくなる²⁵。

5 多数の猫から多数の意識へ

いろいろな問題が出てきたので整理してみる。一方に猫や咀嚼システムの多数性がある。もう一方に意識や視点といった心の多数性がある。前者の多数性は、日常的な語法からすれば当惑させられるものだが、折りあいのつかないものではない²⁶。他方、後者の多数性はより厄介なものとなされる。アンガーによればそれは、デカルト的二元論より受け入れがたく、ネーゲルによれば、議論の出発点を無効にするほどナンセンスである。「人」をこの二極のあいだでどう位置づけるかは微妙である。前節の議論のように人の多数性を前提とせずに問いを立てることもできる²⁷。ただいずれにせよ、人とは何か(personhood)が本稿のテーマではないので、ここでは単純にそれぞれの極の代表として「猫」と「意識」の多数性を考えることにしたい²⁸。

すでにほめかしたとおり、私は後者の多数性を擁護したいと考えている。その多数性はじっさい厄介であり、アンガーやオルソンの問題提起の中ではジレンマやトリレンマの鋭い角の一つを形成している。にもかかわらず私が意識の多数性を擁護するのは、それが、ネーゲルの論じた分割脳のケースに対して整合的なヴィジョンを提示するからである。すくなくとも、意識の分裂や再統合といったものを考えるよりは辻褄が合っていると私には思われる。もちろん意識の多数性が受け入れにくい光景であることに変わりはない。しかし注目すべきは、意識の多数性が上述の問題群におけるジレンマやトリレンマの共通の角になっていることである。いずれ何かに突き刺されなければならないのだとしたら、回数是一回の方がよい。

論文の残りの部分では、角が刺さったさいの痛みをやわらげるための議論を試みようと思う。私はその痛みを、すくなくとも二元論を受け入れたときのそれと同程度か、できればそれ以下にまで軽減したい。そのためにまず、意識の多数性を可能にする形而上学的な根拠を説明し、次に、意識の多数性がどのように可能であるかについての生理学的、心理学的な仮説を述べることにする。

ここで言う「意識」は、もしあるとすれば、猫と同様、個別的で具体的な存在だと考えられる。たとえば私の意識とあなたの意識を個別化することには意味があり、それぞれはさまざまな性質や特徴をもちうる。両者がもつ性質や特

徴には、共通のものもあれば、異なるものもある。また個々の意識は、時間的、空間的に（つまり具体的に）位置づけられる。たとえば、私の意識は数十年前には存在しなかったし、数十年後には存在しないだろう。十数時間前にも一時失われていた。意識の空間的位置づけについては、多少議論の余地があるが、意識を実現する身体や脳を手がかりにしてよいのなら、たとえば私の意識がいまカリフォルニアにないと述べることには十分な意味があるだろう。

だが意識は、猫と、とりわけ具体性に関して大きく異なっている。意識は重ね合わせに対して存在論的に強く、猫はそれに対してずっと弱い。それはこういことである。二つの異なる意識が一つの身体にぴったりと重なる形で（すなわち同じ時空領域に）存在することは可能である。ファンタスティックな状況ではあるが、論理的、概念的にそれを阻むものは見あたらない。他方、二匹の異なる猫が同一の時空領域にぴったりと重なる形で存在するという状況は、ファンタスティックというより、端的に理解不可能である。猫の属する存在者のカテゴリーがそのような重積を阻むように思われる。意識は、もっぱらそれが占める（または生起する）時空領域によって個別化されるわけではないし、ましてや時空領域として個別化されるわけでもない。この特徴を、意識という存在者のもつ具体性の弱さと表現してもよいだろう。多数の意識について「ほぼ一つ」という言い方が意味をなさないのは、この具体性の弱さによる。多数の意識が「ほぼ一つ」を経由して完全な一者に近づくことはない。

質的な同一性が数的な同一性を含意しないというのは、個別者のもつ一般的な特徴の一つであると言われる²⁹。意識も個別者であるならばその例外ではない。それゆえ、同一の時空領域にぴったりと重なる数的に異なる意識は、質的に一致することができる³⁰。そのような光景はさらに法外なものに感じられるが、やはり論理的、概念的にそれを禁じる理由は見あたらない。よって、質的に一致する（たとえばまったく同じ内容をもつ）多数の意識が、大幅にオーバーラップする時空領域に存在しても、存在論的には何の問題もないのである。それらは完全に一致する時空領域においてさえ共存可能なのだから。

時空領域に重なって存在する多数の意識が質的に一致するのは、第一には、それらを実現する諸身体が部分を大規模に（とりわけ神経系を形成する細胞のほとんどを）共有するからであろう。たしかに、もっぱら左脳を含む部分ともつ

ぱら右脳を含む部分とでは共有する部分が比較的少ないが、それらはほぼ同じ入力を持ち、また互いに因果的に密接に連動している。脳梁を切断されたケースにおいてさえ、特殊な実験的環境を除けば、入力ほぼ均質である。

ただしとりわけ大脳が分割されたケースにあっては、複数の意識のあいだに質的な齟齬が起りやすいと考えられる。しかしそうした齟齬は心理的に隠蔽される傾向にある。いくつかの実験結果を自然に解釈するならば、たしかに、意識はしばしば、推測により知ったにすぎない理由を、事後的に自らのものとして（おそらく自己欺瞞的に）作り上げるように見えるのである³¹。実験時の分割脳患者でさえそうなのだから、大脳の分割されていないわれわれにとって、同居する多数の意識のあいだの齟齬に気づく機会は、なおのこと少ないにちがいない。

齟齬が顕在化しないのであれば日常に支障が出ることはないだろう。たとえば、私はこの文を書いている無数のうちのどれかであり、あなたはこの文を読んでいる無数のうちのどれかであるが、どれであってもコミュニケーションは可能である。そこに実践上の違いはない。ただ、この私が、脳出血などにより柏端達也の死よりも早くに消滅してしまう意識の一つでないことは、祈ってよいかもしれない。

以上のように考えると、アンガーの言う意味での「自由」はおそらく放棄せざるをえなくなる。アンガーによれば、多数の自由な選択主体が大幅にオーバーラップする諸身体によって実現されることは信じがたい。真の意味で自由な選択の結果が一致することは奇跡でしかないからである³²。私は、上の数段落で、多数の意識による心的活動の結果がむしろ一致すると考えるべき生理学および心理学的な理由を示唆した（それらはよくて仮説にすぎないが）。私の考えは第3節の [2] のテーゼと整合するものであり、アンガーの考える強い「自由」の概念とは折りあいが悪い。

註

¹ それらを最初に結びつけたのはP・アンガー(Unger(2004))であって私ではない。

² この形の問いにはいくつかバージョンがあり、たとえば、本稿では扱わないが、比較的広範囲の（非連続的な）領域の中にどのように心を数えるかといった問題がある。

それが問題になるのは、われわれ人間を含む心的な存在者が、共同行為のケースに顕著なように、集団的な心的態度と呼べるものをもちうるからである。問いのこのページに対する解答は柏端(2007)で述べた。

- ³ すなわち一つの人間の空間的領域にいくつの心を数えられるのかという問題である。脳が分割されているからといって、心の占める空間領域が分割される必要はない。小脳や脳幹などの多くの身体部分が複数の心によって共有されていると考えることはもちろん可能である。
- ⁴ Nagel(1971), pp. 156-8 [邦訳書 pp. 242-5]. 引用は p. 156 [p. 243] から。引用文は邦訳書に従う。
- ⁵ この規準は野矢(1999), p. 272 に明示されている。
- ⁶ Nagel(1971), pp. 159-61 [pp. 246-50].
- ⁷ Nagel(1971), p. 161 [p. 250]. しかしD・パーフィットは、この種の解釈に基づく意識の分裂と再統合のストーリーを創作し記述している。パーフィットの記述は内的な観点からのものだが、彼はそれを完全に首尾一貫した想像可能なものと主張する (Parfit(1984), pp. 246-7 [p. 342]). 私はパーフィットの描く光景が想像も理解もできない。それゆえ、正直に言えば、首尾一貫しているかどうかさえも分からない。
- ⁸ とはいえ、想像可能性に依る議論が決定的でないことを認めなければならない。そうした光景は端的に理解不可能なだけかもしれないからだ。つまりこういうことである。たしかに私は意識の発生と消滅を理解できない。それがどのようなことかも想像できない。私の自転車の消滅なら想像できる。その主要な構成部分や構成部分のあいだの主要な関係が失われたとき、それは理解可能な仕方での消滅するだろう。だが意識の存在はすくなくともそのような明白な形で何かに依存してはいない。にもかかわらず私の意識は、睡眠によって消滅し、覚醒により再生する。なぜ自分が眠れるのかは私にとって数十年來の謎であるが、しかし他方でほぼ毎晩眠っていることも事実である。端的に理解不可能な事実は存在する。
- ⁹ Nagel(1971), p. 162 [p. 251]. 引用語句は邦訳書に従う。
- ¹⁰ 一つの共同行為主体に対してわれわれはそうしたものを想定しない。それゆえ集団的な「心」の消滅や分裂については、違和感なく語ることができる。
- ¹¹ Nagel(1971), p. 162 [pp. 251-2]. pp. 162-3 [p. 257] にある註 11 も見られたい。
- ¹² Unger(1980). Lewis(1993)ではこの問題が次段落の問題を含む包括的な観点から論じられている。
- ¹³ これは有名な、しっぽを失うティブルスのパズルの可能な帰結の一つであり、この帰結を拒否する論者も多い。パズルは通時的同一性と変化の問題として構成することもでき、前提の組み合わせしだいで多様な解答の仕方が可能である。このパズルの歴史は非常に古く、左足を切除されるディオンの話として紀元前から知られていた(cf. Burke(1994)). 猫のティブルスのパズルに関する文献は多いが、日本語で読めるものとしては Sider(2001)の邦訳書(とくに第5章)がよい。ちなみに、しっぽを除く部分を「猫である」と考えなくても、次節で述べる問題は生じうる(第4節を見よ)。
- ¹⁴ たとえば Lewis(1993)はこれらの問題に対する二つの対処法を提案している。「ほぼ一つ」の概念を用いたものと、超付値の手法によるものである。もちろん他にも、より自然な、よりスマートな、あるいはより技巧的な対処法はありうるだろう。
- ¹⁵ Unger(2004). 以下の要約は私の解釈が入っている部分もあるので注意されたい。
- ¹⁶ Unger(2002); Unger(2004), pp. 215-7.
- ¹⁷ 私の考えでは、その四十九人ないし四十八人が全体としてもつ諸態度のタイプは、五

十人全体のそれと完全に一致する必要はない。しかしいずれにせよそれらの集団は、五十人で出口へ走るといふ共同行為に参加するといふ意図や欲求をもつはずであり、どれも関連する共同行為主体である。

- ¹⁸ アンガーは主に消化の機能を例にこの点を論じている(Unger(2004), pp. 201-2)。
- ¹⁹ 他方、第2節の多数の猫は、互いに大部分を共有しあうことによつてその存在を他に依存させている。また、上述の例の四十九人ないし四十八人の共同行為の存在は、全体である五十人の共同行為の存在から帰結する。
- ²⁰ アンガーはデカルト的な実体二元論の受けいれがたさを軽視しない。二元論の代わりに最終的に彼が示唆するのは、非空間的かつ非時間的に(しかし空間風に)延長する人の部分の存在である。「魂」とでも呼ぶべきその部分が人のもつ心的な力や自由を担うのである(Unger(2004), pp. 221-2)。
- ²¹ たとえば、心理的連続性は前者の同一性にとつてのみ重要であり、ゆえに人と身体(単なる動物としての身体)は、時間を通じて、あるいは様相的に、異なっている…等々。
- ²² Olson(2002); Olson(1997), とりわけ pp. 80-1, p. 106.
- ²³ Olson(1995); Olson(2002), pp. 191ff. Olson(1995)では人の(切り離されていない)手以外の部分が問題になっており、示唆される結論も Olson(2002)と異なっているが、基本的な問題提起は同じである。なお同様の議論が Merricks(1998)にもある。
- ²⁴ Shoemaker(1999), pp. 295ff. 多数の心の存在を否定するには、シューメーカーの答え方の他に、身体や切り離されていない頭部の存在をそもそも認めないという道もある。だがそれはそれで形而上学的コストのかかる選択肢であり、それを第三の角と見なすならば、状況はトリレンマになる。
- ²⁵ ただしこの単純な評価はシューメーカーに対し公平でないだろう。たとえば彼は、これこれの心的性質をもつ人がここにいるという性質が、身体の物的諸性質にスーパーヴィーンすることは認める(Shoemaker(1999), p. 296)。
- ²⁶ こうしたいわゆる「世間的なルーズな用法」と「哲学的な厳密な用法」とのあいだの齟齬自体はおなじみのものである。重要なのはむしろ、それらのあいだのインターフェイスや駆け引きについて検討が可能かどうかである。それらのことが十分に検討されれば、われわれは問題を用法の選択のレベルに帰着させることができるだろう。猫の多数性についてはそうした事柄に関する議論の蓄積がある。
- ²⁷ そのとき、意識や主観性をもつことは、人であることのためだけに必要条件でしかないと考えられている。もちろん、意識や主観的側面が人の概念に含まれるとするかぎり、人の多数性はより厄介な後者のタイプに属するであろう。人の多数性を回避する前節の問題設定では、むしろ、多数の思考主体が人でないといふればそもそも人とは何かといふ疑問が生じることになる(Olson(2002), pp. 200ff.)。
- ²⁸ 「心」の多数性は、すでに指摘したように、純粹に機能的に理解されるかぎりにおいて前者の仲間と見なされる。また「猫」については、家や雲やテーブルと同列に扱うのではなく、人のように扱いたいと思う読者もいるだろう。
- ²⁹ Tooley(1999), pp. viii-ix. この瓜とあの瓜がまさに瓜二つでありうるのはこの特徴のおかげである。
- ³⁰ 同様の存在論的特徴がときにトロープに関して指摘される(たとえば Daly(1994))。もつともトロープについては、その具体性をより強いものと(すなわち時空間的な位置づけがトロープの同一性の十分条件の一部を構成する程度には強いものと)見なす論者もいる(Schaffer(2001))。
- ³¹ Gazzaniga & LeDoux(1978), ch.7. こういう観察結果がある。適切な仕方で左側に提示さ

れたものは右脳にしか見えない。それゆえ、左側に見えたものと関連のあるカードを選ぶという課題を、右脳は(左手で)こなすことができる。しかし、左脳も答えのカードを見られる場合には、易々と、言葉によっても(つまり言葉を使える左脳によっても)答えが与えられ、カードを選んだ理由が口にされる。もちろん左脳は答えや理由を観察や推測によって知ったにちがいない(カードが見えなければ左脳は黙っている)。興味深いのは、M・ガザニガとJ・レドゥーによれば、そのさい「左半球は、問題のカードが選ばれた理由を、推測するような感じで示唆するのではなく、まさに事実の報告として述べた」という点である(Gazzaniga & LeDoux(1978), p. 149 [pp. 129-30]; 引用箇所は私訳)。

³² Unger(2004), pp. 212-5, pp. 217-8.

文献

- Burke, M.(1994), "Dion and Theon: An Essentialist Solution to an Ancient Puzzle," *Journal of Philosophy* 91, 129-39.
- Daly, C.(1994), "Tropes," *Proceedings of the Aristotelian Society* 94, 253-61.
- Gazzaniga, M., and J. LeDoux(1978), *The Integrated Mind*, Plenum Press [柏原恵龍・塩見邦雄・大岸通孝訳, 『二つの脳と一つの心』, ミネルヴァ書房.]
- 柏端達也(2007), 「「われわれ」の行為とは何か——共同性の形而上学」, 『RATIO』4, 講談社, 298-333.
- Lewis, D.(1993), "Many, but Almost One," in K. Campbell et al.(eds.), *Ontology, Causality, and Mind*, Cambridge University Press, 23-38. [柏端達也・青山拓央・谷川卓編訳, 『現代形而上学論文集』, 勁草書房, 1-36.]
- Merricks, T.(1998), "Against the Doctrine of Microphysical Supervenience," *Mind* 107, 59-71.
- Nagel, T.(1971), "Brain Bisection and the Unity of Consciousness," in his *Mortal Questions*, Cambridge University Press, 1979, 147-164. [永井均訳, 『コウモリであるとはどのようなことか』, 勁草書房, 231-57.]
- 野矢茂樹(1999), 『哲学・航海日誌』, 春秋社.
- Olson, E.(1995), "Why I Have No Hands," *Theoria* 61, 182-97.
- (1997), *The Human Animal*, Oxford University Press.
- (2002), "Thinking Animals and the Reference of 'I'," *Philosophical Topics* 30, 189-208.
- Parfit, D.(1984), *Reasons and Persons*, Oxford University Press. [森村進訳, 『理由と人格——非人格性の倫理へ』, 勁草書房.]

- Schaffer, J.(2001), "The Individuation of Tropes," *Australasian Journal of Philosophy* 79, 247-57.
- Shoemaker, S.(1999), "Self, Body, and Coincidence," *Proceedings of the Aristotelian Society*,
Supplementary Volume 73, 287-306.
- Sider, T.(2001), *Four-Dimensionalism: An Ontology of Persistence and Time*, Oxford University
Press. [中山康雄監訳, 小山虎・齋藤暢人・鈴木生郎訳, 『四次元主義の哲学——持続
と時間の存在論』, 春秋社.]
- Tooley, M.(ed.)(1999), *The Nature of Properties*, Garland Publishing.
- Unger, P.(1980), "The Problem of the Many," *Midwest Studies in Philosophy* 5, 411-67.
- (2002), "Free Will and Scientiphicalism," *Philosophy and Phenomenological Research* 65,
1-25.
- (2004), "The Mental Problems of the Many," in D. Zimmerman (ed.), *Oxford Studies in
Metaphysics*, vol.1, Oxford University Press, 195-222.

*テーマレクチャーで述べたものとこの論文とでは構成や強調点がかなり異なっている。
それは発表の当日何人かの方から考えなおすきっかけをいただいたからである。また
本誌の複数の編集者からもいくつか有益なコメントをいただいた。ここにあわせてお
礼を申しあげたい。

(かわばた たつや/千葉大学)